

文部科学省「多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」養成プラン」採択事業
新ニーズに対応する九州がんプロ養成プラン

市民公開講座 がん医療×アートな暮らし 実施報告書

2018. **12 / 8** (土)
於：大分県立美術館



新ニーズに対応する九州がんプロ養成プラン 市民公開講座「がん医療×アートな暮らし」 実施報告書 目次

タイトル	ページ
1. ご挨拶	2
2. 実施概要	3
3. 講演内容	7
がん免疫療法の最前線	7
医療におけるアートとデザインについて	9
4. 展示企画 オンコロジー・オン・キャンパス～がんとともに生きる～	11
5. アンケート結果	13
6. 各大学コーディネーター教員 所感	20
九州大学（九州連携臨床腫瘍学 教授 馬場 英司）	20
大分大学（腫瘍・血液内科学 教授 白尾 國昭）	20
福岡大学（腫瘍・血液・感染症内科学 教授 高松 泰）	21
久留米大学（外科学 主任教授 赤木 由人）	21

1. ご挨拶

「新ニーズに対応する九州がんプロ養成プラン」（九州がんプロ）は、九州の10大学（九州・福岡・久留米・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・琉球大学）が連携し、日本のがん医療で新たに注目されている「がんゲノム医療」、「希少がん」、「小児・AYA世代がん」、「ライフステージに応じたがん対策」のプロフェッショナルを育成するため、大学院教育を中心として活動を行っています。

今回、がんに関する情報発信・普及を目的に、北部エリアの4大学（九州・福岡・久留米・大分大学）が共同で市民公開講座「がん医療×アートな暮らし」を開催しました。ノーベル賞でも話題となりました「がん免疫療法」の最新情報について話題を提供するとともに、世界で活躍する造本作家・デザイナーの駒形克己（こまがた・かつみ）氏をお迎えし、自身のがん経験や病棟をデザインした経験を踏まえたご講演をいただきました。

また、初の試みとして、会場となった大分県立美術館の1階では、共同主催である日本イーライリリー社の協力をいただき、同時開催の展示企画「オンコロジー・オン・キャンパス〜がんとともに生きる〜」を行いました。がんと診断された方、そのご家族・ご友人が制作した絵画・写真の展示を通じて、がんと告知された時の不安、がんと共に生きる決意、がんの経験を通して変化した自身の生き方など、何かしら講演以外の形においても市民の皆様にお伝えできたならば幸いです。

私どもが事業のテーマに掲げている「がん」は、誰しもが、いつか罹る可能性が十分にある『身近』な病と言えます、いざという時に備えて早いうちから正しい知識を身に付けておくことが大切であると考えます。九州がんプロとして、がん医療の専門家育成に更に力を入れることはもちろんですが、様々な事業を通して「医療」や「がん」について、市民の皆様へより身近に感じていただけるような活動を行って参ります。

今後とも、ご理解とご支援をいただきますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

北部エリア コーディネーター教員

九州大学	九州連携臨床腫瘍学 教授	馬場 英司
福岡大学	腫瘍・血液・感染症内科学 教授	高松 泰
久留米大学	外科学 主任教授	赤木 由人
大分大学	腫瘍・血液内科学 教授	白尾 國昭



2. 実施概要

1. 催事名称

市民公開講座「がん医療×アートな暮らし」

2. 主催

新ニーズに対応する九州がんプロ養成プラン

日本イーライリリー株式会社

3. 後援

福岡県、福岡市、大分県、大分市

4. 日時

平成30（2018）年12月8日（土） 14時00分～16時00分

5. 会場

大分県立美術館2階 研修室（大分県大分市寿町2番1号）

6. 講師

九州大学大学院医学研究院 九州連携臨床腫瘍学講座 教授 馬場 英司 氏

造本作家・デザイナー

駒形 克己 氏

7. プログラム

4ページのとおり。本プログラムを、公開講座当日、会場にてご参加の皆様へ配付しました。

8. ポスター、チラシ

5,6ページのとおり。講師をお引き受けいただきました駒形克己氏に依頼し、デザインの制作もご担当いただきました。駒形氏は講演の中で、「私にとって医師は『千手観音』のような存在。今回のデザインではそれをイメージして（さすがに千本の手は描けないので）、聴診器を当てているところ、触診しているところ、メモを取っているところを描いた。」とお話しされました。

9. 広報活動

公開講座の周知に当たり、以下の広報活動を実施しました。

- ・チラシ、ポスター発送：大分県立美術館、後援機関、大分県内自治体・文化施設・図書館・児童館等
- ・広告掲載：大分合同新聞夕刊（12/1,3～6）、西日本新聞大分版朝刊（12/8）、月刊「ぶらざ」12月号
- ・チラシ折込：大分合同新聞朝刊（12/6）
- ・各大学ホームページ、九州がんプロ公式ホームページ、SNS（Facebook・Twitter）での発信

10. 参加者数

93名（一般参加者73名、関係者20名）

新ニーズに対応する九州がんプロ養成プラン

市民公開講座「がん医療×アートな暮らし」

日時 平成30(2018)年 12月8日(土) 14:00~16:00

会場 大分県立美術館 2階 研修室 (大分県大分市寿町2番1号)

プログラム

1. 開会挨拶 大分大学大学院医学系研究科 腫瘍・血液内科学講座 教授 白尾 國昭
2. 講演「がん免疫療法の最前線」
(座長) 大分大学大学院医学系研究科 腫瘍・血液内科学講座 教授 白尾 國昭
(講師) 九州大学大学院医学研究院 九州連携臨床腫瘍学講座 教授 馬場 英司
<休憩>
3. 講演「医療におけるアートとデザインについて」
(座長) 福岡大学医学部 腫瘍・血液・感染症内科学講座 教授 高松 泰
(講師) 造本作家・デザイナー 駒形 克己 氏
4. 閉会挨拶 久留米大学医学部外科学講座 主任教授 赤木 由人

ごあいさつ

この度は、新ニーズに対応する九州がんプロ養成プラン市民公開講座「がん医療×アートな暮らし」にお越しいただき、誠にありがとうございます。

私どもは、九州10大学(九州・福岡・久留米・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・琉球大学)が連携して、日本のがん医療で新たに注目されている「がんゲノム医療」、「希少がん」、「小児・AYA世代がん」、「ライフステージに応じたがん対策」のプロフェッショナルを育成するため、大学院教育を中心として日々活動を行っております。

今回、がんに関する情報発信・普及を目的に、北部エリアの4大学が共同で市民公開講座を行う運びとなりました。がん免疫療法の最新情報について話題提供するとともに、造本作家・デザイナーの駒形克己氏をお迎えし、医療におけるアートとデザインに関するご講演をいただきます。

また今回、美術館1階にて展示企画「オンコロジー・オン・キャンバス～がんとともに生きる～」を同時開催しております。がんと診断された方、そのご家族・ご友人が制作した絵画・写真等の展示を通じて、がんと告知された時の不安、がんと共に生きる決意、がんの経験を通して変化した自身の生き方など、言葉だけでは伝えきれない想いを感じていただければ幸いです。

北部エリア コーディネーター教員

九州大学 九州連携臨床腫瘍学 教授 馬場 英司

福岡大学 腫瘍・血液・感染症内科学 教授 高松 泰

久留米大学 外科学 主任教授 赤木 由人

大分大学 腫瘍・血液内科学 教授 白尾 國昭

「新ニーズに対応する九州がんプロ養成プラン」市民公開講座 がん医療×アートな暮らし

平成**30**年**12**月**8**日(土)**14:00~16:00** / 会場: 大分県立美術館2階研修室

- がん免疫療法の最前線 講師: 九州大学(九州連携臨床腫瘍学講座) 教授 馬場英司
- 医療におけるアートとデザインについて 講師: 造本作家・デザイナー 駒形克己

定員: 約 90 名 (先着順にて受付) 申込方法: ホームページから、もしくは電話で事務局までお申し込みください。

主催: 新ニーズに対応する九州がんプロ養成プラン

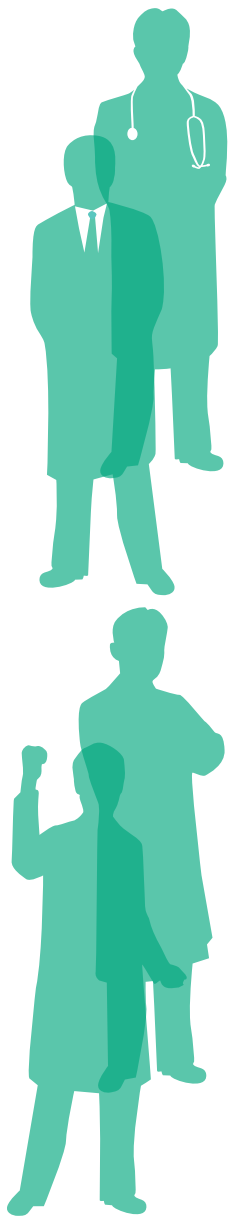
日本イーライリリー株式会社 後援: 福岡県、福岡市、大分県、大分市

問合せ先: 新ニーズに対応する九州がんプロ養成プラン事務局(九州大学医系学部等事務局) TEL: **092-642-6240**

ホームページ: <http://www.k-ganpro.com/detail/152>



「新ニーズに対応する九州がんプロ養成プラン」とは？



文部科学省『多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材(がんプロフェッショナル)」養成プラン』事業のひとつとして、九州の10大学(九州,福岡,久留米,佐賀,長崎,熊本,大分,宮崎,鹿児島,琉球大学)が連携して行うプロジェクトです。

これまで10年にわたって連携体制を築き、九州内のがん医療専門職の教育に取り組んできました。現在は、日本のがん医療において新たに注目されている分野、「がんゲノム医療」、「希少がん」、「小児・AYA世代がん」、「ライフステージに応じたがん対策」の課題を解決する人材を育成すべく、大学院教育を中心としたさまざまな取り組みを行っています。今回の市民公開講座は、北部エリアである、九州,福岡,久留米,大分の4大学が共同で運営しています。

今後も皆さまのご指導・ご支援をいただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

<北部エリア> コーディネーター教員

九州大学:九州連携臨床腫瘍学 教授 馬場 英司

福岡大学:腫瘍・血液・感染症内科学 教授 高松 泰

久留米大学:外科学 主任教授 赤木 由人

大分大学:腫瘍・血液内科学 教授 白尾 國昭

関連展示 美術館1階・アトリウム

オンコロジー・オン・キャンパス

—がんとともに生きる—

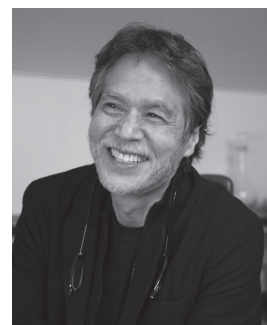
日本イーライリリー(株)は、人々がより長く、健康で充実した生活を実現できるよう、医薬品の開発等を通じて、がんをはじめ様々な領域で日本の医療に貢献しています。「リリー・オンコロジー・オン・キャンパス」とは、同社が行う、がんと診断された方、その家族・友人を対象とした絵画・写真・絵手紙のコンテストであり、今回、同社の協力の下、これまでの応募作品の中から数点をお借りして展示いたします。

がんと告知された時の不安、がんと共に生きる決意、がんの経験を通して変化した自身の生き方など、言葉だけでは伝えきれない想いを、ぜひ展示を通して感じていただければ幸いです。

講演者略歴

駒形克己

造本作家・デザイナー



1953年静岡県生まれ。1977年渡米。ニューヨークCBS本社などでグラフィックデザイナーとして活躍後、1983年帰国。自身の子どもの誕生をきっかけに絵本を制作。以後多数の絵本を出版。その活動は世界へと広がり、展覧会やワークショップが世界各地を巡回。2001年視覚障がい者に向けた本「折ってひらいて」「LEAVES」が、フランス国立近代美術館ポンピドーセンターより発行。近年ではニューヨーク近代美術館 MoMAより「パズルブック」が、また作品集「LES LIVRES DE ... KATSUMI KOMAGATA」がフランスより出版される。2000年・2010年・2016年イタリア・ボローニャ RAGAZZI賞 優秀賞、2002年スイス国際児童図書賞(F.E.E.)特別賞、2006年GOOD DESIGN・ユニバーサルデザイン賞(九州大学病院小児医療センター病棟の環境デザイン)、2007年GOOD DESIGN賞(つみ木)他、受賞多数。

2012年急性リンパ性白血病を発病し翌2013年に骨髄移植を受け、同年4月に退院し仕事へ復帰。2013年小海町高原美術館にて、また2014年にはイタリア、ボローニャにて展覧会「駒形克己展—THINK PAPER」を開催。同年より立教大学兼任講師、女子美術大学特別招聘教授を兼務。後進の指導にあたる。また駒形克己のドキュメンタリー番組がWOWOWより放映され、2014年国際エミー賞にノミネート。現在に至る。

大分県立美術館(OPAM)までのアクセス

〒870-0036 大分市寿町2番1号
JR大分駅府内中央口(北口)から徒歩15分
大分ICから車で10分



3. 講演内容

講演1 「がん免疫療法の最前線」

(九州大学大学院医学研究院 九州連携臨床腫瘍学講座 教授 馬場 英司)

1. 「新ニーズに対応する九州がんプロ養成プラン」と市民公開講座について

平成29年度より開始された文部科学省「多様な新ニーズに対応するがん専門医療人材養成プラン」採択事業である、「新ニーズに対応する九州がんプロ養成プラン」は九州内の医療系10大学の協力により運営されています。本プランは九州におけるがん専門医療人材、特にがんゲノム医療、希少癌・AYA 世代のがん、そしてライフステージに応じたがん医療を提供できる人材の育成を目指しています。またこの事業の内容や、がん医療の現状と最新の情報などを広く市民の方々にお知らせすることも大切な役目と考えています。今回の市民公開講座では、「がん医療×アートな暮らし」というメインテーマを掲げました。ひとつは近年進歩の著しいがん免疫療法について理解を深めて頂くことを目標としています。そして同時に、がんという疾患に向き合う患者さんやご家族、ご関係の方々、がん治療も含めてより豊かな暮らしを送っていただく上で、芸術の力も大きな助けになるのではないかと考え、アートと医療の関係について駒形克己先生のご講演もお願いしています。医療と芸術という二つの分野の融合により、がん医療自体がさらに豊かなものになることを期待しています。

2. 「がん」とはなにか

現在日本人の半数ががんに罹患し、3人に1人ががんにより亡くなると言われています。がんの原因は喫煙、食事、環境、感染など様々な要因がありますが、基本的には身体の正常な細胞に複数の遺伝子異常が生じることによりがん細胞が発生します。がん細胞は異常な増殖能や転移能などの性質を持つことにより、身体中に腫瘍(かたまり)を形成します。医療機関では X 線や内視鏡検査など様々な検査法を駆使してがんの広がりや診断し、これに基づき治療方法を決定します。治療には主に外科療法、放射線療法、薬物療法があり、今回の免疫療法、特に免疫チェックポイント阻害治療は薬物療法として説明します。

3. 免疫とは

私達ヒトの周囲にはおびただしい種類のウイルス、細菌、かびなどの病原性微生物が存在します。「免疫」とは、ヒトの体内の感染性の病原性微生物や異物を見つけ出しこれを排除する働きのことです。免疫という働きを担う「免疫系」の細胞は、骨髄、胸腺や全身のリンパ組織に存在しており、顆粒球、NK細胞、マクロファージやT/Bリンパ球(T/B細胞)など様々な細胞により構成されています。ヒトの身体があらゆる種類の病原性微生物に反応し、これらを除去できるのは、免疫系で重要な働きをするT細胞に多様性があるからです。例えばウイルス感染細胞の表面には、ウイルス由来の抗原ペプチドが結合した主要組織適合性抗原(MHC)分子が存在します。このペプチド/MHC複合体を特異的に認識するT細胞受容体は、計算上ではヒト体内で 2.9×10^{22} 種類生み出されるとされており、この多様性によりあらゆる病原性微生物にも対応できると考えられます。このような免疫系の仕組みによりヒトの身体は守られています。

4. がんと免疫

病原性微生物から身体を守る免疫系が同時にがんの排除にも働いているということは、古くから知られていました。1909年にポール・エールリッヒ博士はこれをがん免疫監視機構として提唱しました。そして1991年にはブーン博士らにより、悪性黒色腫細胞が有するMAGE蛋白が免疫系の標的となって黒色腫細胞が排除されることが証明され、免疫系を用いたがん治療研究が加速しました。極めて高い多様性を有するTリンパ球が様々ながんの排除にも働いていることは実験的には確かめられましたが、免疫監視機構があるにも関わらずがんが増大してゆく理由は明らかではありませんでした。その理由の一つが、近年注目を浴びた免疫チェックポイント分子(PD-1など)の存在です。この分子を表面に有しているがん細胞は、近づいたTリンパ球の活性を抑制するため、免疫系からの攻撃から逃れられるのです。免疫チェックポイント阻害薬(抗PD-1抗体薬など)は、このがん細胞の免疫系からの逃避

を許さないため、Tリンパ球は標的のがん細胞を排除できるのです。現在これらの薬剤は世界中で様々ながん種を対象として実臨床で用いられ、優れた効果を示しています。これらの治療研究の成果が認められ、本年のノーベル医学生理学賞がアリソン教授と本庶教授に授与されました。

5. 免疫チェックポイント阻害薬の課題

免疫チェックポイント阻害薬による治療には十分な注意が必要です。この薬剤によりヒトリンパ球が活性化するため、これまでの殺細胞性抗がん薬や分子標的薬とは異なった種類の副作用が現れることがあるからです。皮膚炎や大腸炎、甲状腺機能異常など比較的頻度の高い副作用に加え、希ですが致命的となるような心血管疾患や劇症1型糖尿病などが出現することも報告されています。

そのため例えば九州大学病院では、がん診療を担当する医療スタッフだけではなく、様々な副作用に関係する専門診療科の医師、看護師、薬剤師、ソーシャルワーカーなど多職種が一堂に会して、副作用対策を検討する会議を開催しています。このようなサポート体制があつて初めて安全で有効な免疫療法が可能となると考えています。

6. まとめ

これまでの腫瘍学、免疫学研究の進歩に基づく新たながん免疫療法が登場し、実臨床で効果を示しています。より安全で有効な治療を行ってゆくには、多くの専門家による連携体制が必要です。九州がんプロプランでも新たながん免疫療法の研究開発や実践を担う人材の育成に努めます。



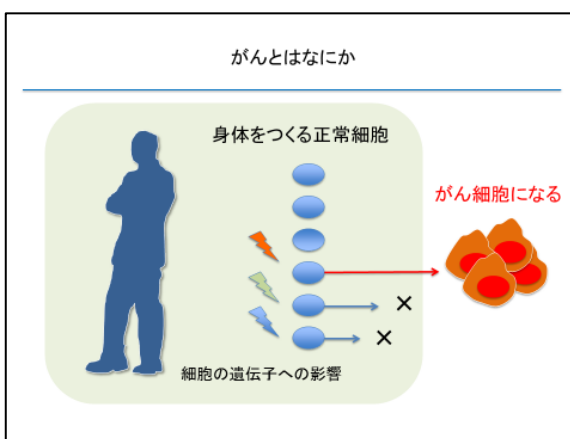
講演の様子



馬場教授



座長（大分大学・白尾教授）



講演スライド（一部）

講演2「医療におけるアートとデザインについて」

(九州大学大学院医学研究院 九州連携臨床腫瘍学講座 助教 岩間 映二)

現在の九州大学病院小児科病棟(小児医療センター)のデザインは駒形氏によって手掛けられたものです。入院生活を送っている子供たちに少しでも楽しい気持ちを持ってもらうよう、また構造が分かりやすいように様々な工夫がなされています。デザイナーとしてだけでなく、造本作家として、絵本を通じた子供たちとのコミュニケーション、心の触れ合いの経験が医療に活かされた成果であると思います。小児医療センターのデザインについて、また、自身の急性白血病での闘病生活の経験、その時に感じたことを通し、「医療におけるアートとデザインについて」の講演をいただきました。

駒形氏は、20代にデザイナーとして渡米し、米国の大手放送局であるCBSでのデザイン担当(ニューヨーク)を3年半務められるなど、活躍の後に30歳で日本に帰国されました。36歳の時にご長女が誕生し、生まれた際はどう接すればよいか分からず、生後3カ月の際に自分を見つめてきてドキッとされたそうです。どうにかしてコミュニケーションを取ろうと、様々な形、大きさ、位置の図形を示したカードを作り、娘さんに見せたとのことです。その中で、最も娘さんの興味を引いたのは「黒い丸い点」であったそうで、それは母乳をもらうために本能的に乳首を求めているのではないかと気づいたそうです。この時に作成したカードを絵本として出版したところ、ニューヨーク近代美術館(MOMA)のミュージアムショップでの販売を機にパリの関係者の目に留まり1994年に展覧会を開催など造本作家としての道が開け、現在まで絵本を作製し続けておられます。娘さんとの絵を通しての心と心の触れ合いが、造本活動のきっかけとなったのだと思います。

2006年九州大学病院(当時の病院長 水田祥代氏)新病院建設の際、駒形氏に小児医療センターのデザイン依頼があり、駒形氏の優しさと思いやりが詰まった病棟の建設が進められました。元来、病棟は無機質であり、目印となるものも少なく、大人や病院スタッフでも迷ってしまいそうな所であり、またその無機質さが得てして冷たい印象を与えるものであり、まだ幼い子供達にとっては尚更であります。そこで駒形氏は、病棟内の手すりの色を様々な色に変え、その手すりの色に応じて「オリーブ通り」や「ぶどう

通り」などの通りの名前を付け、各場所に動物の絵を始めとしたデザインを施して言葉ではなく絵で導かれるようにしました。また、医療スタッフと子供たちのコミュニケーションの一助となるよう、医療スタッフの白衣に入れることが出来るくらい小さい絵本(「森のお医者さん」)を作製しました。その絵本とマッチするようなストーリー性を持った壁画が病棟内の随所に設けられました。このような活動が評価され、九州大学病院の小児医療センターは2006年のグッドデザイン賞を獲得しました。

駒形氏は様々な絵本を発表されていますが、造本活動の中で、末期の子供たちのために絵本を通して死のことを伝えることが出来ないかという依頼があった際には、なかなか作製することができなかつたそうです。時を同じくして、お世話になったおじ様がくも膜下出血のためお亡くなりになり、おじ様への感謝の気持ちから死と輪廻をテーマにした「Little Tree」という絵本を発表されました。この絵本はいわゆる「仕掛け絵本」であり、ページごとに木が現れ、季節とともにその姿を変えていくものです。駒形氏の作品は自身の経験と人に対する思いやりの結果がデザインに反映されていると感じられました。

造本作家、デザイナーとしての活躍のさなか、2012年夏、海外出張中に全身倦怠感、毎晩の足のつりを自覚され、何とか日本に帰国されて東京慈恵会医科大学病院を受診したところ、検査の結果、急性白血病でした。当初余命2カ月と宣告され、入院闘病生活を余儀なくされましたが、普段通りに生活をしたいという思いから仕事を継続するとともに、SNSで自身の状況を発信し続けました。自身の入院経験だけでなく、入院をしている立場に立ちみて、このようにしたら入院患者さんにとって良いのではないかということを発信しました。骨髄移植を行い、現在もお元気で活躍されておられますが、骨髄移植は非常に苦しかったとのこと。無菌室に入院した時に病室の窓が大きくて外を見渡すことが出来たこと、アンリ・マティスの切り絵が心の支えになったとのことで、デザインが如何に人を励まし、医療環境を良くさせるかということをご講演いただきました。

お話を通じ、駒形氏の作品はそれを求める人たちの立場になり、その人たちが置かれた状況を把握、場合によっては経験し、その人たちと直接接して心を通わせた結果出来たものであるということを感じ取れました。それは、我々医療人にとって最も大切なことであるということを改め

て思うことが出来た講演でありました。

海外出張も多く、お忙しい中、大分までお越しいただき素晴らしい講演をいただきましたこと、がんプロ関係者一同心より感謝申し上げます。



(左上から)

- ・「黒い丸い点」の説明
- ・九州大学病院の様子（手すりの色、「通り」の設定）
- ・「Little Tree」を読む駒形氏
- ・Twitter（SNS）で闘病の様子を発信
- ・アンリ・マティスの絵



駒形克己 @KatsumiKomagata 2013年1月17日

入院する身にとって、できるだけ陽当たりのいい部屋と、暖色系の色に囲まれたい。壁はオフホワイトやクリーム色。段差を必要とする場合は淡いオレンジ。家具類は黄色からオレンジ。エメラルドグリーンもいい。手すりには強い色。通路ごとに色を変えると分かり安い。床もオレンジとかオークカラーに。

発信した Twitter（SNS）のツイート（一例）

4. 展示企画「オンコロジー・オン・キャンパス～がんとともに生きる～」

今回の市民公開講座では、同時開催のイベントとして、展示企画「オンコロジー・オン・キャンパス～がんとともに生きる～」を実施しました。公開講座の企画段階から協力を得ておりました日本イーライリリー株式会社が行う『リリー・オンコロジー・オン・キャンパス』事業（※）をもとにした展示を行いました。

講演以外の形でも市民の皆様にご覧いただくことができればという想いから、この展示の実現に至りました。今後も様々な事業・企画との連携を行いながら、がんプロ事業を発展していきます。

※リリー・オンコロジー・オン・キャンパス：

日本イーライリリー社が行う、がんと診断された方、およびそのご家族やご友人を対象とした絵画・写真・絵手紙のコンテスト。

<https://www.locj.jp/>



展示パネル



展示の様子（大分県立美術館 1階・アトリウム）



公開講座配付資料（リーフレット、募集要項）

オンコロジー・オン・キャンパス

～ がんとともに生きる ～

日本イーライリリー株式会社は、人々がより長く、健康で充実した生活を実現できるよう、医薬品の開発等を通じて、がんをはじめ様々な領域で日本の医療に貢献している企業です。

「リリー・オンコロジー・オン・キャンパス」とは、同社が行う、がんと診断された方、その家族・友人を対象とした絵画・写真・絵手紙のコンテストです。今回、市民公開講座を「美術館」という場で行うに当たり、講演以外の形でも何かしら市民の皆様に「がん」というものについて知っていただければと考え、同社の協力のもと、これまでの応募作品の中から数点をお借りして展示する企画を行うこととなりました。

がんと告知された時の不安、がんと共に生きる決意、がんの経験を通して変化した自身の生き方など、言葉だけでは伝えきれない想いを、ぜひ展示を通して感じていただければ幸いです。

展示趣旨の説明パネル（展示会場に掲示）

5. アンケート結果

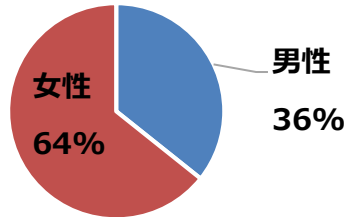
1. アンケート用紙

18 ページのとおり。会場にて他の資料とともに配付し、公開講座終了後に受付で回収を行いました。

2. 集計結果 [回収率] 77% (回答者数 56 名 / 一般参加者総数 73 名)

【設問 1】 性別

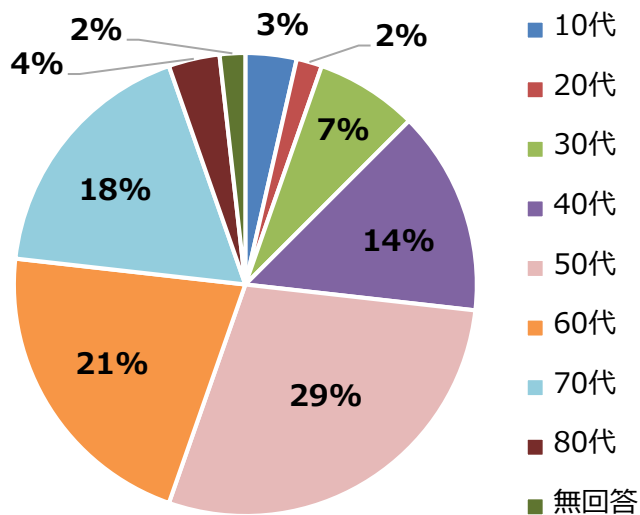
	合計
男性	20
女性	36
計	56



【設問 2】 年齢

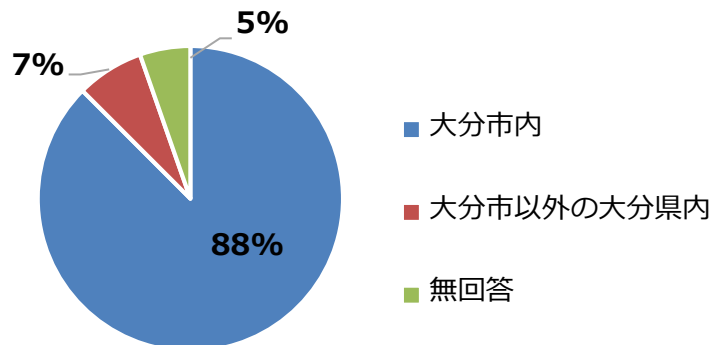
50～60 代の参加者が全体の 50% を占める。

	合計
10 代	2
20 代	1
30 代	4
40 代	8
50 代	16
60 代	12
70 代	10
80 代	2
無回答	1
計	56

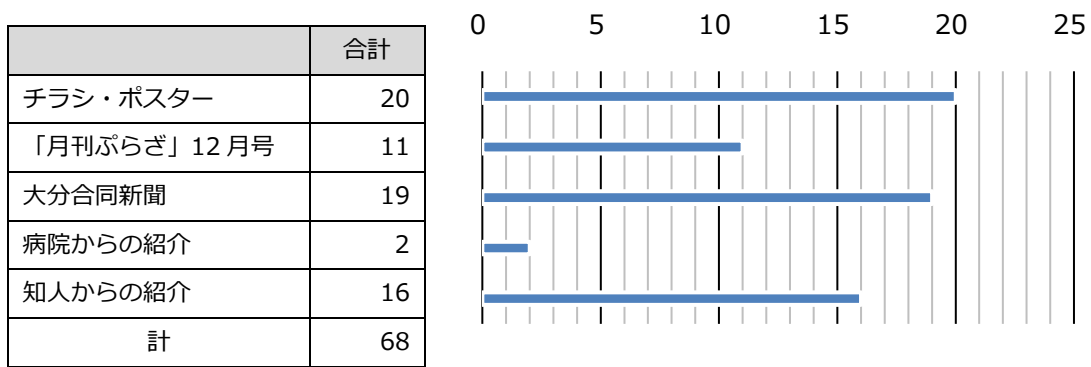


【設問 3】 お住まい

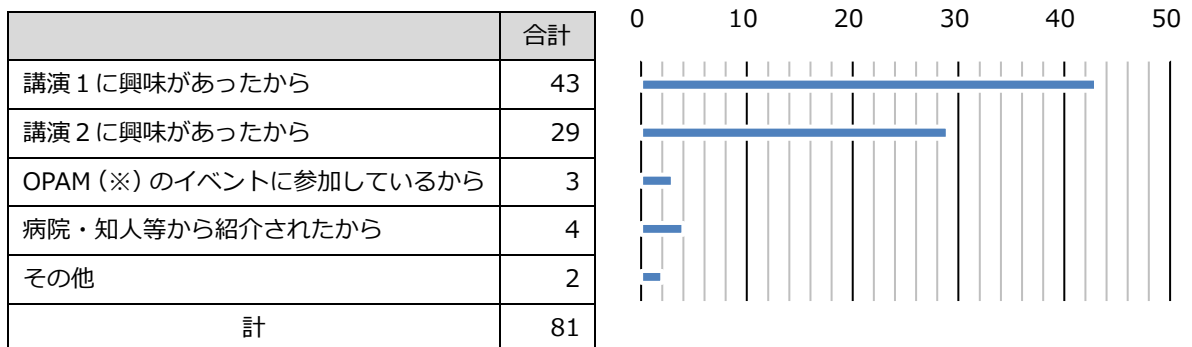
	合計
大分市内	49
大分市以外の大分県内	4
無回答	3
計	56



【設問4】公開講座を、何によってお知りになりましたか？（複数回答可）



【設問5】ご参加の理由をお聞かせください。（複数回答可）



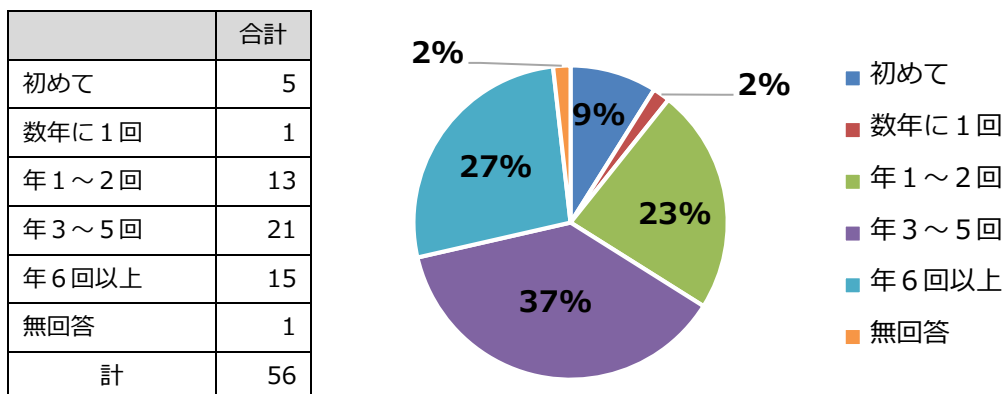
※OPAM：大分県立美術館

[その他]

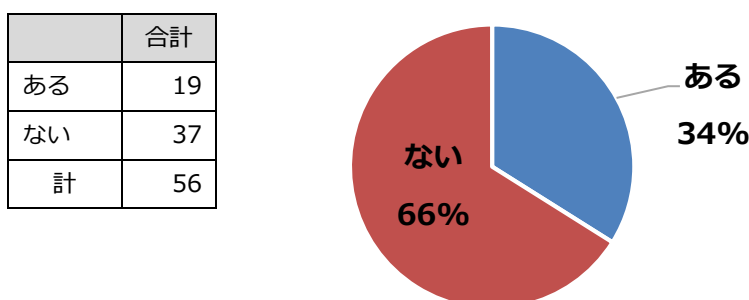
がん患者がいるので、今後の参考のため。／ 乳がんの有効かどうか知りたいため。

【設問6】大分県立美術館の利用に関して、お聞かせください。

(1) 大分県立美術館には、どのくらいの頻度でお越しになりますか。



(2) 大分県立美術館で、展示以外の催事に参加されたことはありますか？

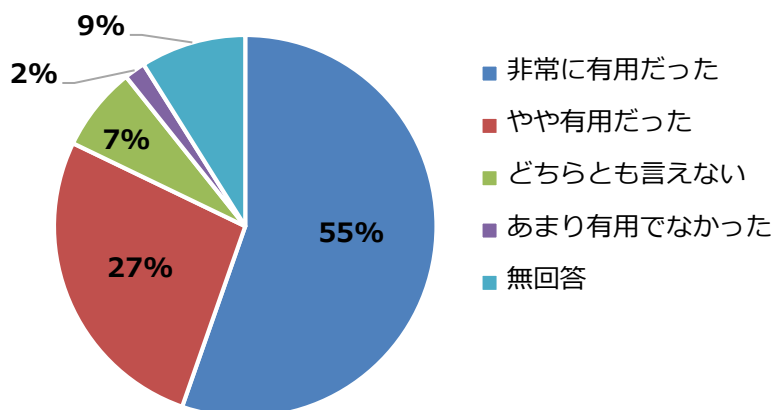


(3) 「ある」を選んだ方へお聞きします。これまでどのような催事に参加されましたか？

プラネタリウム / 国民文化祭 / ギャラリートーク / 宮本先生の「滝廉太郎の曲」/
造形遊び / 子どもの夏休み作品作り / ワークショップ / 夜のおとなの金曜講座 /
琵琶の演奏 / コンサート / 講演会

【設問7】講演1「がん免疫療法の最前線」についてのご感想

	合計
非常に有用だった	31
やや有用だった	15
どちらとも言えない	4
あまり有用でなかった	1
無回答	5
計	56

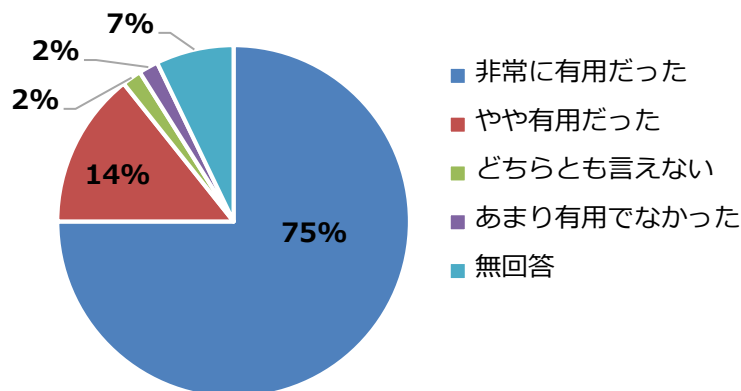


[具体的な感想]

- ・免疫療法の仕組み、抗 PD-1 療法、T 細胞の事、がん細胞のしくみ等が理解できた。
- ・免疫療法について、治療法や副作用など知ることができて良かった。
- ・体内にある細胞ががんをやっつける働きをするという事を初めて知った。人の体の作りの凄さと、それでもがんを完全になくせない怖さを感じた。
- ・身内が希少がんで、大分では症例が少なく対応が難しいかと思っていました。九州がんプロのようなものがあるのなら、大分でも治療の相談ができるのだろうとわかりました。内容は専門的でしたが、わかりやすくお話しいただきありがとうございました。
- ・リンパ腺って大事なんだと思った。主人が以前腎細胞がんになったので聞いてみてためになった。
- ・平易な表現とカラフルな資料映像で解りやすかった。医療も着実に進歩しているのだと強く感じた。
- ・講師の水準（知的・専門的）が非常に高く、細胞を画像で見たりお話を聞いたり、とても良かったです。
- ・治療の先の、生活の質に目を向けられている先生のお話を聴くことができ大変勉強になりました。
- ・がん免疫療法の今がすごくわかり易く解説されていた。がん患者にとって、いろんな分野がチームを組んで治療法を考えてくれるのは頼もしい。
- ・免疫チェックポイント阻害薬の作用のメカニズムがわかりやすかった。オプジーボの効果・副作用等の現状も聞きたかった。
- ・具体的なデータの解説が欲しかった。
- ・がん治療の進歩がよくわかりました。今後、がんと聞いても驚かない、治る病気になって欲しいです。

【設問8】講演2「医療におけるアートとデザインについて」についてのご感想

	合計
非常に有用だった	42
やや有用だった	8
どちらとも言えない	1
あまり有用でなかった	1
無回答	4
計	56



[具体的な感想]

- ・駒形先生の魅力的なお話、気に入りました。昨年皮膚がん治療をしていた頃を思い出し涙が出ました。先生のこれからのご活躍を心から楽しみにしています。
- ・実際に病気を経験された先生本人のお話を聞くことができたり、病院や病気とアートの関係を知ることができ、とても面白かったです。
- ・医療とアート？と思いましたが、小児科への配慮、お子さんや病院への絵本、とてもすばらしいと思いました。駒形先生の本を探してじっくり見てみたいです。
- ・先生自身も病気を経験されたということで、とても共感できました。先生の作品もとても楽しめました。
- ・ツイート内での、家具の色やスイッチの位置などは患者の周囲の人達がサポートの一つとしてできることだと思った。
- ・がんから生還するためには、がんと向き合うだけでなく、生きること・生きるためにすることに目を向け、怖がらず治療することが大切だと思った。
- ・話の内容が多くとても感動の連続でした。病気の内容、体験、おもしろく良かったです。
- ・ポスターが目にとまりました。医療とアートという珍しい講演、大変良かったと思います。
- ・実体験を交えてお話いただき、いろいろな想いの深さを知ることができ大変ありがたく思いました。
- ・やさしい話で穏やかな気分になれた。涙が出そうになった。聞けて良かった。幸せな気持ちになりました。
- ・病院内にいて、限られた環境の中でアートに触れることで心が和らいだり力になったりするものだと感じた。
- ・最初はどんな内容が興味しんしん・・・が次第に、活動や内容に感動しました。がんと闘いすごい人間性と技術に、「こんな方もいる」と感激しました。大変大変お疲れ様でした。
- ・アートやデザインが人に与える影響は大きいと感じました。
- ・あのインスピレーションはどこからやってくるのかが一番の興味でした。
- ・つらい治療に取り組む上での、病院という環境へのアプローチは勉強になりました。また、治療を乗り越えての創作活動、生命力の強さに感銘を受けました。
- ・入院経験者のひとりとして、そうそう、それぞれと患者の気持ちが爪の先まで分かる方で、話に惹きつけられました。
- ・治療を受ける患者さんの気持ちをご自身の作品にも活かしている、あるいは意見を述べている内容に感銘しました。
- ・入院中のツイートは今までに考えたことのない発想で感動いたしました。絵本も手にとってみたいと思いました。

【設問9】「医療」と「アート」を結び付けた今回の企画について、ご意見や感想があればお聞かせください。

- ・最初は??と思いましたが、全ての事に人と人の向き合いの大切さがあると感じました。とても良い企画であると思います。
- ・タイトルから内容は想像できませんでしたが、とてもわかりやすく聞いて良かったと思います。
- ・父はがん治療で入退院をくり返していますが、退院するとしばらくは大きなサイズのジグソーパズルを作ります。集中して時間も忘れ、すばらしいアートが出来上がります。これも医療とアートだなあと感じました。
- ・美術館で行う企画として、とても斬新で面白かったです。がんという硬くて難しそうなイメージが払拭された気がします。医療をより身近に感じられる良い企画だと感じました。次回を楽しみにしております。
- ・現在がん患者の家族の友人として講演に来た。治療について直接のアドバイスをする立場ではないが、生活していく中でのアドバイスや情報、元気づけをしたいと思っていたので非常に参考になった。
- ・切り口が新しく、とても興味深かったです。ありがとうございました。
- ・同じ悩みのある人にとって、とってもいい企画だと思う。アートに触れてゆっくりした時間が癒しになると感じた。
- ・大変ユニークです。今日の講師、すばらしい。パンフレットの内容にも感心しました。
- ・場所も内容も参加しやすい形で、大変素晴らしいと思いました。
- ・どうつながるんだろう?とっていました。患者さんが描く・作ることで、癒される・活力になることを知りました。
- ・医療では考えられない効果がアートから強く受けられると、強く思う。とても良い企画だと思う。
- ・駒形さんはすごいと思いました。何の取り得もない私でも自信がもてる、勇気がもてるようになりました。いくつになっても決して天狗にならず、感謝の気持ちと素直に真剣に向き合う姿に感激しました。
- ・初めての企画と思いますが、「明」と「暗」の組み合わせも良いと思います。がん体験の話がもう少し欲しかった。

【設問10】今後、公開講座で取り上げて欲しいテーマや、事業に関するご意見がありましたら、お聞かせください。

- ・がん患者を持つ家族やその友人のサポート／がん気付くための検査／がん音楽療法／がんの遺伝（種類）について
- ・駒形先生の講演をまだたくさん聞きたいです。
- ・楽しかったので、同じようなシンポジウムがあったら良いと思う。
- ・特保、栄養食品、薬の副作用の注意点など／がん治療における免疫と食事について
- ・人の気力・気というのは医学では敵わない強いものがある。そんな新たな分野と今後の医療の発展・協力に関するもの。
- ・1日も早く、がんが難病でなく安心して人生を過ごしていけるようになることを望みます。がんはイコール死ではないと思える企画を望みます。
- ・がん、認知症、脳血管障害などに関する診断治療に関すること

9. 「医療」と「アート」を結び付けた今回の企画について、ご意見やご感想があればお聞かせください。

10. 今後、公開講座で取り上げて欲しいテーマや、事業に関するご意見がありましたら、お聞かせください。

アンケートは以上です。ご協力誠にありがとうございました。
会場入口にて、スタッフへお渡しください。

福岡大学（腫瘍・血液・感染症内科学 教授 高松 泰）

大変印象に残る市民公開講座でした。まず会場である大分県立美術館の近代的でお洒落な外観に目を惹かれました。中に入ると明るく開放的な空間が広がっており、木が贅沢に使われた天井やオブジェに心が穏やかになりました。講演会場は、若い方からご年配の方まで多数の参加者でいっぱいになり、馬場英司先生の「がん免疫療法の最前線」についての講演を熱心に聞き入っている姿に、がんの治療に対する関心の高さを知ることができました。続いて駒形克己先生が「医療におけるアートとデザイン」について講演されました。小児科病棟の建設に際して、療養中の子供の利便性は無論のこと、その心に配慮して

設計・デザインに取り組みされた話はとても斬新で、参加者は時には驚き、時には深く頷きながら聞かれていました。造本作家・デザイナーの立場で、かつご自身が白血病の治療を受けられた経験および子供さんの成長を見守られてきた経験を踏まえての講演内容は、我々医療者にとっても示唆に富むもので、病院のデザインのみならず医療の在り方を考える上で大変勉強になりました。このような素晴らしい市民公開講座に参加できたことに感謝するとともに、ぜひ九州各地で開催することを目指したいと強く思いました。

久留米大学（外科学 主任教授 赤木 由人）

2018年12月8日に『がん医療×アートな暮らし』というテーマで、大分県立美術館において市民公開講座を開催した。九州大学教授の馬場英司先生が“がん免疫療法”について大分大学教授、白尾國昭先生の座長のもとに講演された。がんの由来、人体の免疫、そしてがんと免疫の関係をわかりやすく説明していただいた。免疫療法でノーベル医学生理学賞を本庶 佑博士が受賞された直後であり偶然ではあったと思うがタイムリーな話題で、参加された方は興味深く聴講されたことと思う。

次に、自身が白血病で闘病経験をお持ちの作家・デザイナーの駒形克己氏が、自分の子供を通して学んだこと、

患者として感じたことを福岡大学教授、高松 泰先生の座長で講演していただいた。人の成長ということへの感動、患者目線での医療の大切さを教えていただいた。医学は“サイエンスとアート”であるということが言われるが、病む人をどのように癒すかはこの両方が必要であることを改めて感じ、私自身が感銘を受けた。

会場は美術館でありその入り口のホールには、がん患者やその周りの人が描いた絵や写真などが展示された。がんに対する様々な思いが込められているものであり、アートの大切さを知る有意義な公開講座であったと思う。



福岡大学・高松教授（講演2・座長）



久留米大学・赤木主任教授（閉会挨拶）

文部科学省『多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」養成プラン』採択事業
新ニーズに対応する九州がんプロ養成プラン 市民公開講座「がん医療×アートな暮らし」実施報告書

発行 2019年2月 九州大学がんプロ、大分大学がんプロ、福岡大学がんプロ、久留米大学がんプロ
<http://www.k-ganpro.com>

文部科学省『多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」養成プラン』
採択事業 新ニーズに対応する九州がんプロ養成プラン

市民公開講座「がん医療×アートな暮らし」実施報告書

発行 平成31（2019）年2月
編集・発行 新ニーズに対応する九州がんプロ養成プラン 北部エリア（九州・福岡・久留米・大分大学）
事務局 九州がんプロ事務局（九州大学医系学部等事務部）
ijsganpro@jimu.kyushu-u.ac.jp
<http://www.k-ganpro.com/>